

# 開かれた学校づくりから地域教育コミュニティづくりへ

——地域とともに歩む北条中校区のとりくみ——

岩崎 泰司

## 要 約

大阪府大東市の北条中校区では、「荒れ」の克服をおもに地域との連携の面からもすすめた。その取り組みのなかで、地域と協働して子どもたちを支援する体制を創ってきたこと、地域文化である北條太鼓を中心にフェスティバルを開くようになったことなどを通じて、北条中校区の「すこやかネット（大阪府の総合的地域力活性化事業）」である「ふれ愛教育協議会」の活動内容が創られた。そのことは、「学校・地域・家庭のトライアングルで地域に生きる子どもを育てよう」とのスローガンにつながった。また、この活動は地域に学校を開くことから「教育コミュニティ」につながり、その先に「人権のまちづくり」にもつながる内容をもつことになった。

## 一 はじめに

大東市立北条中<sup>ほうちょう</sup>学校は大阪府内でも東に位置し、飯<sup>い</sup>盛山<sup>もり</sup>のふもとにある開校二五年目の学校である。北河内の中でも南に位置し、南を東大阪市と北を四條畷市と接

している。近くに野崎参りで有名な野崎観音があり、山の中腹にはいくつかの古墳が点在し、京都と高野山をむすぶ東高野街道沿いの一部が校区である。

校区に被差別部落をかかえた同和教育推進校として、創立当初から同和教育を根底にすえた取り組みがすすめられてきた。創立前後、部落解放運動の高揚期とも重な

り、同和対策事業によって部落の住環境がそれまでと様変わりしてきた。教育環境の面においても北条青少年教育センターの設立などもあり、解放子ども会の活動も活発に行われていた。したがって、北条中の教育は、創立当初から部落と積極的に関わりながら取り組まれてきた。その取り組みは、一九九五年度の生徒会がつくった「北中宣言」や部落解放研究会・民族文化研究会・障害者問題研究会などの人権三クラブの活動などに、現在も受け継がれている。

しかし、一九九〇年代には入ると少子化による校区の子ども会活動の停滞や創立以来の教職員の異動など、北条中をとりまく教育環境の変化に加え、「キレル・ムカツク・キシヨイ」などに象徴される現在の子どもの様相が北条中でも現れはじめ、「いじめ・不登校」などの課題が北条中でも大きな教育課題として浮かび上がってきた。それは、それまでの北条中の「集団づくり」や「学力保障」などの取り組みでは解決しえない課題であった。十年ほど前からの数年間は、対教師暴力・校舎破壊など「荒れ」の状況が続いた。その当時、九項目確認（男女混合班や班長会議など）を中心とした「集団づくり」や、英語の分割授業など授業改革をめざした「授業づくり」の取り組みなど、新たな提起と取り組みがすすめら

れたが、「荒れ」の状況は続いていた。授業エスケープ・器物破損・対教師暴力・生徒間暴力・バイク無免許運転・喫煙など、あげればきりがなかったが校内で発生し、また一方では「いじめ」と思われる行為の多発、そのことが原因で学校に来なくなつたと思われる生徒の存在もあった。そして、ガラスを割る、校舎内で花火をする、机・イスを投げるなどで、大きな事故につながりそうになつたことは一度や二度ではない状況であつた。北条中の教職員自身も毎日おこる生徒指導上の課題にふりまわされ、その日常が普通に思えるほど感覚が麻痺していくなかで、「子どもたちがどうして荒む状態になるのか」「自分をコントロールできず、その時々々の感情のまま衝動的な暴力に走ってしまうのか」などと悩む日々が続き、くたくたに疲れながらも、毎日の取り組みをすすめる状態であつた。

## 二 青少年育成会議として夏休み前巡視

一九九七年度の一学期、校区青少年指導委員会の最初の会合において当然のごとく北条中の「荒れ」のことがとりあげられた。北条中の教職員は当時の北条中の現状を正直に話し、「地域の力を貸してほしい」と訴えた。

それに応じる形で青少年指導員たちが中心になって、自治会や町会などの地域への働きかけを通じて「北条中校区青少年育成会議」という名称の集会をもつことになった。

集会には校区の自治会・町会、青少年指導員、民生委員、子ども会、保護司、そして校区内の三小学校の教職員やPTA、北条青少年教育センター、教育委員会、警察など総勢百名近くが集まった。初めて聞く北条中の「荒れ」の現状に「教師は何をしてんねん」「そんなにひどいとは思っていなかった」「とにかく悪い子どもをどうにかしろ」「先生らはわしらに何をしてほしいねん」「子どもや孫を中学校に出せない」などの本音とともに「学校やその周辺でたまっている中学生に通行をじゃまされた」「学校の近くの店が困っている」「学校に行けていない子どもが近くにいる」などの地域での子ども現状も出され、「それだけのことを学校としてさらけ出すのは勇気の要ることだ」「小学校としても考えていきたい」「協力する具体的な内容とは何だ」「子どもたちと教師の間関係をつくるべきだ」「巡視をやったらどうか」「学校に行つてこの目で現状を知りたい」などの提案なども意見として出された。この会議では二つのことが参加者のあいだで確認された。ひとつは夏休み前の夜間巡視実施、

もうひとつは各自治会・町会ごとに地区懇談会を開こうというものであった。現在、この「北条中校区青少年育成会議」は、二〇〇三年度で七回目を数え、毎年北条中校区の子どもたちの現状を確認する場となり、四回目は、北条中の生徒会が後述する「生徒総会」の取り組みを発表を行った。また、子育ての課題や他校区での地域連携の取り組みを学習する場になっている。

夏休み前の夜間巡視も「北条中校区青少年育成会議」と同じく、計七回を数え、北条中央公民館をベースに各地区の自治会・町会の役員や青少年指導員・防犯委員・PTA・小中の教師など毎日五十名を超す人が集まり、毎年三日間でのべ二百名近くが集まっている。十数人をひとつのグループにして三班に分かれて巡視を行い、巡視の前後には集会を持って、北条中校区の子どもたちの現状と課題について共通認識を図るようにしている。当然、地域の人々と意見交換ができる場ともなり、一方では地域と一体となった取り組みになっている。

### 三 地区懇談会の実施そして生徒の動き

一九九七年度の二学期から始まった地区懇談会は、当初、左記にあるような目的で始めた。

- ① 学校ではなく地域（地区）主催での地区懇にする
- ② 地域に学校を開き、正確な情報を地域に伝える
- ③ 地域の教育ネットワークづくりを構築する。
- ④ 北条中校区の学校を地域の学校として位置づける
- ⑤ 保幼小中高の連携で子育てを地域ぐるみで考える

一年目の地区懇では「荒れ」の状況に驚きと怒りに満ちた意見が出され、「北条中校区青少年育成会議」の再現となったが、地域全体として子どもたちのことを考えていきたいという目的は達成するものとなった。その年度には、校区の四つの自治区と一一の町会主催の地区懇を一〇地区に分けて行った。各自治区・町会の実状によって内容は多少異なるものの、共通して学校の「荒れ」の現状に対して「教師は何してるんや」「学校の内部をオープンにすることは大事」「現在の子どもは集団をつくりきれない」などの意見、「子ども会の再生と充実をはかろう」「学校に行つて実情を知ろう」「近所で声をかけあおう」などの提案が出された。

現在、この地区懇談会も今年で七回目を数える。今は、後述する「北条中校区ふれ愛教育協議会・地域教育部会」の主催で、小学校の校区も考慮して六地区で行われている。

出される意見はいつもあらゆる領域にわたってはいるものの、地域として子どもたちのことを考えたいという思いは共通なものとして、まとめることができる。また、一方では保護者の参加の少ないことが指摘されたり、子育てのこと、子ども会が解散してしまっていること、子どもたちの茶髪などの服装面のこと、近所で子どもに声がかけていく状況にあることなど、さまざまなきが議論になっている。そのようななかにあっても「先生、あの子に秋祭りの時、こう声をかけておいたで」「あの子の親、町会の役員で話したいんやけどな」などの声を聞くようになった。

一九九七年度は、学校内でも九項目確認を中心にした「集団づくり」に新しい動きが見られ、七月の生徒総会では「友達」をテーマにフリートーキングを実施した。生徒全員の前で「俺、友達がいないねん」「体張って止めてくれる友達がいたら、俺こんな風になっていなかっただ」「俺、たばこやめようと思つてんねん」「俺、変形服やめようと思つてんねん」「落ち着いて勉強したい」「ドアを蹴るの、やめてほしい」など、六〇名以上の子どもたちが生徒会の呼びかけに応じて自分の本音を発言した。この取り組みは前期後期の生徒会の中心的な取り組みとして位置づき、二〇〇三年度前期で一三回を数えて

いる。生徒総会までに班長会議・学級討議・学年集会・自由参加による模擬生徒総会と取り組みを積み重ね、「生徒総会は北条中の心臓部だ」と生徒が発言するほどの学校あげての「語る会」に発展し、北条中の「荒れ」を克服する生徒の動きの原動力になっている。

#### 四 ふれ愛教育推進事業(CCP)の取り組み

一九九六年度に始まっていた「ふれ愛教育推進事業」は、現在の「すこやかネット」につながる取り組みで、中学校区単位で校種間連携や地域連携をすすめる事業であった。青少年育成会議などについても、一九九八年度からこの事業に含みながら取り組みを展開していった。それは、中学校区単位で校種間連携をすすめる「学習指導促進部会」と地域連携をすすめる「家庭教育促進部会」の二つに分かれて、活動するものであった。「ふれ愛教育推進事業」三年目の一九九八年度にはそれまでの総括をふまえ、青少年育成会議や地区懇をこの事業に位置づけ、地域の各団体役員も「ふれ愛教育推進事業」のメンバーに加えた。そして、青少年育成会議や地区懇での議論の中心は、北条中の「荒れ」克服から「地域でどう子どもたちを育てるか」に移っていった。

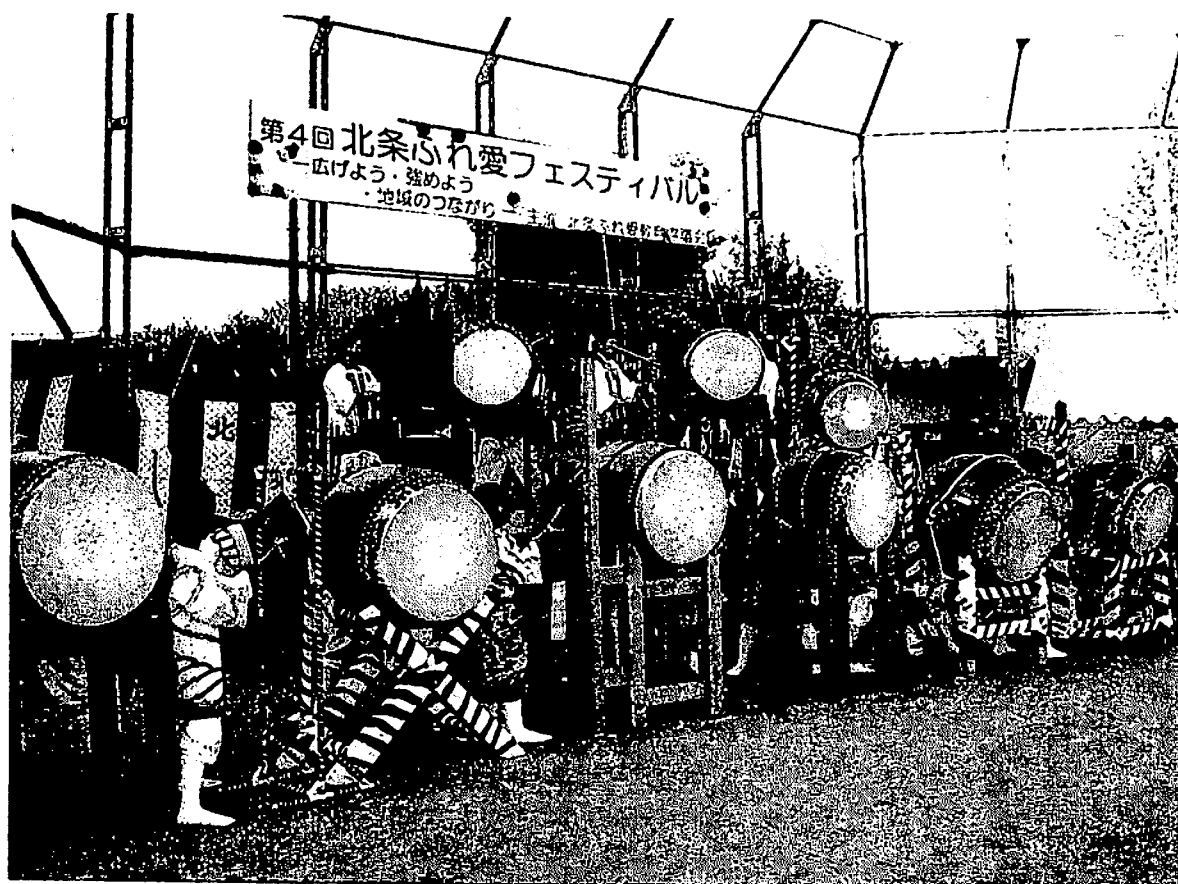
「学習指導促進部会」は、それまでの小中連携をさらに保幼小中高連携に発展させた取り組みになっていた。また一方では、地域連携との関わりで、北條太鼓を幼稚園や小学校、中学校そして高校も取り入れるようになっていった。「ふれ愛教育推進事業」の最終年度には「北条中学校区ふれ愛推進週間」と称して北条小・北条中の学校公開をはじめ、北西小・四条小の授業公開そして北条保育所・北条幼稚園の保育公開も行った。北条中の授業公開では「総合的選択履修」に地域の人々を講師に迎えるの授業を行った。北条小では人権総合学習のなかで地域住民を助言者に位置づけるなどの取り組みを公開した。こうした取り組みは、現在の教育課程に生かされ、各校で実践されている。そうしたもののなかには、北条の「おやじ応援隊」など地域とのつながりなしにはできない取り組みが数多くある。

「家庭教育促進部会」の目的は家庭・地域の教育力の向上にある。北条青少年教育センターを事務局として、親子の「ふれ愛」を目的とした「つり大会」や子育てをテーマにした講演会などの事業を地域の人々を巻き込んだ形で行ってきた。事業最終年度には、それまでの講演会や地区懇などで話題になった地域での子育ての課題のまとめとして、保幼小中の教師が集まり、半年の論議を

経て「子育てポスター」を作成し、北条中校区の地域に自治会・町会を通じて配布した。

## 五 ふれ愛フェスティバルそして北條太鼓

「ふれ愛教育推進事業」の活動のなかで特筆すべきことは、地域文化の発信につながったイベントの開催である。それは、一九九七年度総括の場で地域住民から出された「北條太鼓をメインにしたイベントをやろう」との提案から始まった。それを受け、青少年指導員会の後押しで行われていた地域の青年たちのロックフェスティバルと結びついて「北条ふれ愛フェスティバル」となったものである。実行委員会の事務局には、青少年指導員・北條太鼓保存会・教育センターのロックメンバーなどが加わり、準備がすすめられた。一九九八年一二月のフェスティバル当日には四〇〇名ほどの地域住民が北条中の体育館に集まった。五町からの太鼓五台によるオープニング、そして各ロックバンド、吹奏楽部の演奏と続き、五町の太鼓一〇台によるエンディングと続いた。翌年からはPTAのバザーや市民団体や障害者団体も加わり、二年前からは北条中のグラウンドにイベントを集中させ、五回目を数えた昨年には一二〇〇人以上が集まる地



域の一大イベントになっている。

この「北条ふれ愛フェスティバル」の取り組みの一方で、それぞれの町会のだんじり保存会の太鼓部を横断的にまとめて、一九九八年度の一〇月には北條太鼓保存会が正式に発足した。それが、北條太鼓が北条地域全体に広がるきっかけになった。北條太鼓保存会は古い町会だけでなく、意欲があれば新興住宅地の子どもたちにも太鼓を教えようとの動きを見せ、土曜日・日曜日を使って月に二回ほど北条中で太鼓の練習をするようになった。そして新興住宅地が校区の中心である北条西小でも、バザーなどのイベントで北條太鼓演奏が行われるようになった。地域の子ども会活動の低迷のなかでも、北條太鼓の練習を通じて子どもたちが結集する場がつくられてきている。

北條太鼓とは、秋祭りのだんじり曳航で演奏される太鼓で、秋祭りの前夜祭では、北条神社の境内で奉納されてきた。この北条のだんじりや太鼓は長くこの地域に伝わってきたもので被差別部落の長い差別の歴史と深く関わってきた。北条で編纂された解放読本「北条だんじり物語」にそのことが記述されている。

明治半ばの頃、北条の秋祭りに何とかだんじりを曳きた

い、子どもたちに曳かせたいという人たちが集まり、自分たちで一銭講を「ムラ」の人たちに呼びかけた。「ムラ」の人たちは働き、お金を少しずつため、売りに出されていただんじりを購入し、「ムラ」まで他の町会の妨害や差別を乗り越えながら運んだものとされている。その後、いろいろな妨害や嫌がらせを乗り越え、一〇年後には狛犬を北条神社に奉納することで北条神社の氏子となり、「ムラ」の人たちは一緒にだんじりを曳くようになった。戦後に入り解放運動が「ムラ」にも広がり、北条の各地域でも「ムラ」に対する見方が変わってきた。一九八九年に「野崎ふるさと祭り」として秋祭りがリニューアルする中、「ムラ」の北条人権文化センターの前に五町会の太鼓が勢揃いし、野崎の商店街まで北条地域を練り歩くこととなった。はじめ、他の町会のだんじりも「ムラ」の中に入ってきたのである。

ちょうどこの頃からだんじりの太鼓をひとつのものにしようとの動きが始まった。「ムラ」の太鼓は他の町会と少しリズムが違い、交流することもなかったので独自の太鼓であった。しかも長い間、それぞれの町会では、自分の町会の太鼓を他の町会にたたかせるということはなく、閉鎖的な中で太鼓が伝えられてきたいきさつがあった。「ムラ」の青年が他の町会に出かけ太鼓を習いはじめ、それを「ム

ラ」に広げていった。現在、北條の太鼓はひとつのリズム、曲想になっている。さらに「ムラ」の青年や受け入れた町会は、他の町会にも呼びかけ、それぞれの町会のだんじり保存会の太鼓部を横断的にまとめ、それまでのだんじりの太鼓を北條太鼓と呼び、北條太鼓保存会の結成にむけて動き出した。このことは、北條小や北條中などが、それぞれの学校行事の中で北條太鼓を取り入れるきっかけともなった。そして「北條ふれ愛フェスティバル」開催の年に正式に北條太鼓保存会を結成することとなった。そして、この北條太鼓保存会は古い町会の子どもたちだけでなく、北條中校区の新しい住宅街の子どもたちにも呼びかけその活動を展開している。

こうした北條太鼓に関わる動きは、北條小では以前から部落問題学習に生かされ、「北條だんじり物語」の学習のなかで太鼓を演奏することにもつながっている。北條中でも北中祭・体育の部でのオープニングに三年生による北條太鼓演奏が取り入れられて一〇年を数える。北條小や北條中の北條太鼓の取り組みには、いつも北條太鼓保存会のメンバーに協力いただいている。

また北條太鼓に関わる動きは、二〇〇一年に北條人権文化センターでつくられたビデオ「だんじりと北條太鼓

く町名をとりもどす時」の制作意図にもあるように、差別の厳しさから自ら消した町名の復活の動きにつながった。それは、辻之町・四条之町・中之町・北之町の四町会と第二自治区で五町会と称していたのに対し、北條太鼓に集う第二自治区の若者たちの間から、町名を名乗れないのが差別であり、そうした差別を乗り越えるためにも町名復活が必要だと訴えたことから始まった。二〇〇二年一〇月の秋祭りでは、東之町と書いたはつぴや旗をあらためて作り、第二自治区の一部では、東之町のはつぴを着ての参加になった。名実ともに、五町まとまつての北條の祭りになっている。

## 六 「北條中校区ふれ愛教育協議会」の活動

二〇〇〇年度に入って新たな地域教育の組織づくりをはじめ、地域の各団体にも呼びかけて「北條中校区ふれ愛教育協議会」を立ち上げた。テーマを「学校・地域・家庭のトライアングルで地域に生きる子どもを育てよう」とし、市の事業「学校及び地域社会等連携推進事業」、そして府の事業「総合的地域力活性化事業（すこやかネット）」を受けて活動している。

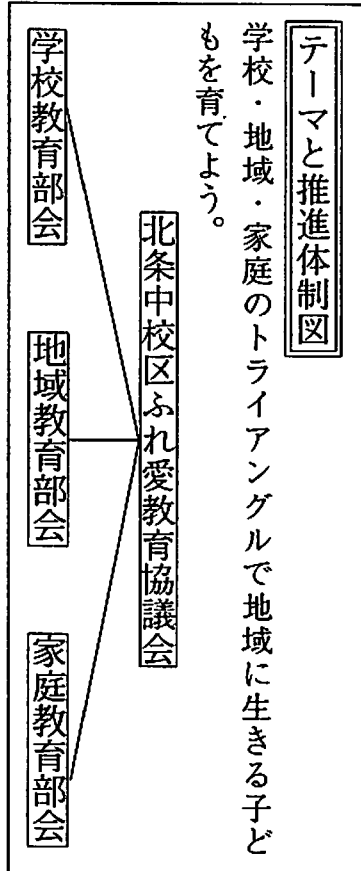
活動内容はフェスティバルや校区清掃など実行委員会



形式で取り組むものと、日常的には保幼小中高の連携をすすめる学校教育部会、地域との連携をすすめる地域教育部会、子育て支援や保護者間の連携をすすめる家庭教育部会の三つの部会で取り組むものとに分けて連携事業を行っている。

**テーマと推進体制図**

学校・地域・家庭のトライアングルで地域に生きる子どもを育てよう。



**事業推進の目的**

- ① 北条中校区の学校・地域・家庭の総合的な教育力の構築をはかる。
- ② 地域社会で子どもを育成するとりくみを行い、学校教育や地域における教育活動を活性化する。
- ③ 学校・家庭・地域の豊かな人間関係づくりを通じて、子どもたちの「人権意識」や「生きる力」を育むことを目的とする。

**事業推進の目的**

**目標**

- 地域における教育課題について共通認識をもち、開かれた学校づくりから地域教育コミュニティづくりをすすめる。
- 保育所・幼稚園・小学校・中学校・高校の交流をすすめ、連携を深める。
- 地域・家庭の子育て支援事業を行い、地域・家庭の教育力を高める取り組みをすすめる。
- 地域文化の創造に関わる取り組みをすすめる。

**活動内容**

(ふれ愛教育協議会)

**事業内容**

- 年数回の協議会を行い、各部会の課題や動内容を調整する。
- 学校を中心に地域の教育ネットワークづくりをすすめる。
- 北条中校区青少年育成会議の実施（北条中校区の全体会もかねて）。
- 北条中校区「ふれ愛」フェスティバルを実施する。

<p>↓参加各組織や地域に呼びかけ、実行委員会を組織し、実施する。</p> <p>○校区清掃などのボランティア活動の実施。</p> <p>○他の中学校区との連携や交流をすすめる。</p>	<p>(学校教育部会)</p> <p>事業内容</p> <p>○小中を中心とした保幼小中高全体での連携活動をすすめる。</p> <p>○保育所・幼稚園と小学校間の連携と子どもや教職員の交流を行う。</p> <p>○小学校と中学校間の連携と子どもや教職員の交流を行う。</p> <p>↓小小の合同の取り組みや小中間の中学校体験などの交流。</p> <p>↓小中教職員の連絡会や合同の研修会と交流活動。</p> <p>○中学校と高校間の子どもや教職員の交流を行う。</p> <p>↓中高の連絡会と高校体験などを行う。</p> <p>○保幼小中高と地域教育機関との連携や交流を行う。</p> <p>○保幼小中高、地域の人材の交流授業を行う。</p>
<p>↓出前授業の実施(小↓保幼、中↓小、高↓中)。</p> <p>↓地域の先生の実施(保護者、地域の方、専門家による授業)。</p>	<p>(地域教育部会)</p> <p>事業内容</p> <p>○地区懇談会の実施(自治区・町会の協力も得て)。</p> <p>○地域での子どもの育成に関わる取り組みを行う。</p> <p>↓盆踊り巡視や校区巡視などの青少年健全育成の活動の実施。</p> <p>↓校区の学校・PTA・青少年指導員会などの交流事業を実施。</p> <p>↓「少年を守る店」や「子ども110番」の取り組みをすすめる。</p> <p>○地域の行事や自主的活動への子どもの参加を促進する。</p> <p>○北条ブロック青少年指導員会及び北条校区青少年指導委員会、北条ブロック子ども会育成連絡協議会などとの連携を行う。</p>

## (家庭教育部会)

## 事業内容

- 地域・家庭の子育て支援に関わる講演会や研修事業などを行う。
- ↓子育て講座や講演会などの実施や教育相談などの活用。
- ↓保育所や幼稚園での就学前教育に関する支援活動の実施。
- 保護者を中心に合同社会見学など地域の大人の交流事業を行う。
- つり大会など大人と子どもがふれあう取り組みや事業を行う。
- 親子の体験授業など学校の取り組みや行事への参加を促進する。
- 北条青少年教育センターや北条ブロック子ども会育成連絡協議会などとの連携を行う。

北条中校区の取り組みは、地域の人々と教育課題について共通認識を図るだけで精一杯であるが、北条中校区で学校・地域・家庭における大人や子どもも相互のつながりをつくり、結集する場になってきつつある。また、北条太鼓に集う地域の人々との出会いや連携は感動的であった。差別を乗り越える力が、地域住民の「差別」「被

差別」双方向の立場での連携や協力から生まれていることを実感している。

地域の教育力再生のためには、単に地域に学校を開放するだけでなく、積極的に学校が地域に入り、家庭や地域の教育について地域の方々と語り合うことから始まること、この取り組みを通じて考えている。本年もそうしたことを原点に、「地域で生き地域で育つ子ども」を中心に置いて、諸々の活動を展開している。七回目となった「青少年育成会議」は、「ふれ愛教育協議会」全体の取り組みとなり、その協議会の総会的な会議にもなっている。その際、不登校の課題をめぐってスクールカウンセラーの話も聞くことができた。また、家庭教育部会では北条中校区の小中のPTA組織が合同の社会見学を実施するようになって四回目を迎えている。また今年も秋には、ふれ愛フェスティバルが予定され、その準備がすすめられていく。人と人のつながりが希薄になったといわれる今の子どもたちにとって、子どもと子ども、そして大人と子どもがつながる機会を、できるだけ意識的に創ることが大事だと考えている。北条中校区の私たちは、「開かれた学校づくりから地域教育コミュニティづくり」にいたる流れを、そうした営みから創造していこうと思っている。